

ハルシナイから上流へ②

前回は、安政四年(一八五七年)に、松浦武四郎が持参した野帳(フィールドノート)に描いた、**掲載地図の「ニツネカムイサバ(鬼の首)」**と「カモイ子トパケ(鬼の躰)」のスケッチを紹介した。また、幕府への報文日誌の「再篙石狩日誌」で、ハルシナイから右の伝説の岩を左右に見て、激流を上る武四郎直筆の絵を見ていただいた。

松浦武四郎は、文久元年(一八六一)年)にこの調査のダイジェスト版の『石狩日誌』を刊行した。これは、木版彩色刷の一冊本である。**下の丸木舟の絵は、『石狩日誌』の中でも最も有名な絵で、石狩川沿岸の市町村史では、昔は必ず掲載されていた。**昭和三十四年発行の『旭川市史第一巻』では、表紙の裏に、カラーで掲載されている。この絵は、石狩川の発寒川口附近の武四郎一行の様子で、柳を折って骨組みを作り、一枚の落葉で屋根のように覆ったという。絵

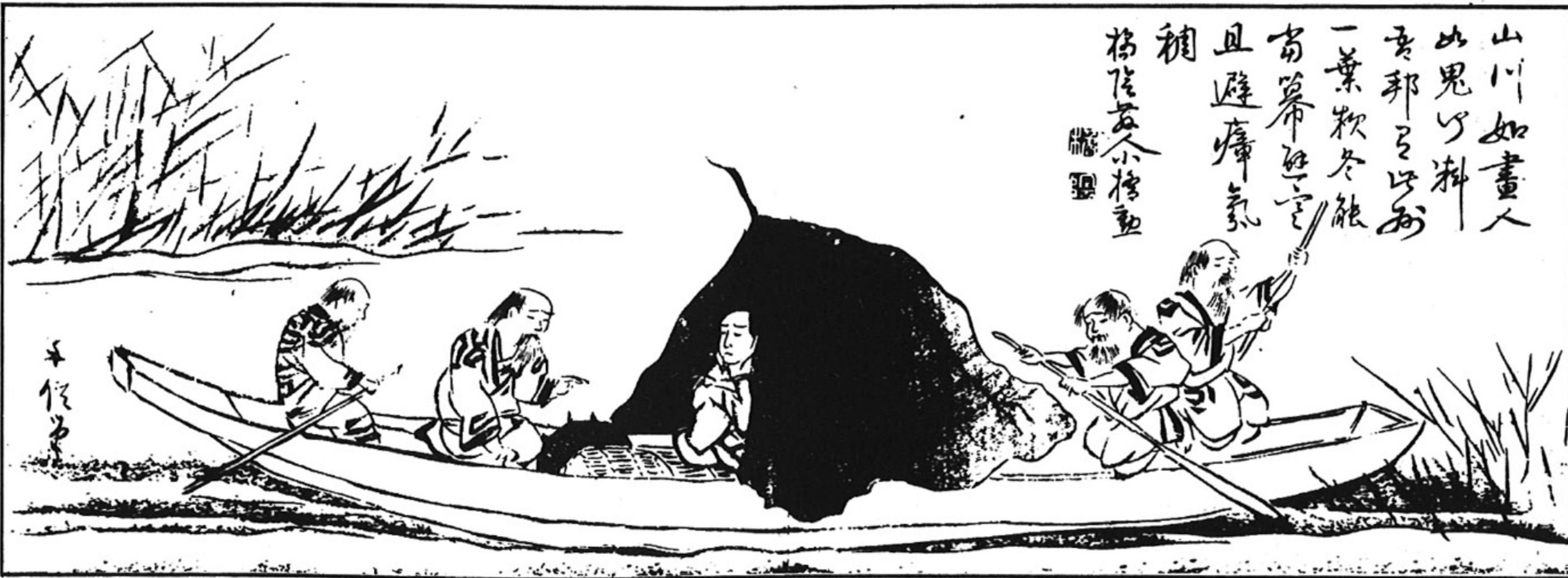
断章 旭川のアイヌ語地名研究

77

高橋 基

は左下隅に好信筆(詳伝不詳)となっていて、残念ながら武四郎ではない。この『石狩日誌』は、フィクションが多いことと、「再篙石狩日誌」が公刊されたこともあって、その後は、公的資料としては採用されなくなった。その

山川如畫人
此鬼ヶ嶽
吾邦を以て
一葉秋冬能
尙算無定
且避瘴氣
補
梅佐久小舟
繪



『石狩日誌』のハルシナイでは、「丸木舟も五六艘備えあり、故に是より又舟にて上る也」とし、左右の伝説の大岩附近の激流を苦闘して上る文章は、ほぼ前回の文と同じである。

さて、明治時代になってのカムイコタンの踏査記録の最初は、明治五年、開拓使使掌の高畑利宜が、開拓判官・岩村通俊の命を受け、丸木舟で上川に入り、約三カ月にわたって上川の地を調査したものである。この調査で高畑利宜は、開拓使庁内では、石狩川筋の識者として喧伝されたという。また、高畑利宜は、明治十九年に北海道庁が設置されてからは、上川道路の開削、

駅逓の開業運営など上川開発の功績顕著であるが、明治五年の上川調査は、その端緒となる調査行であった。

高畑利宜は、開拓使の役人としての調査であるので、大山酒十樽と煙草等アイヌの人たちの嗜好品を準備し、米ならば二十俵程積載可能な大型の丸木舟二隻に積み込み、通辞(通訳)亀石熊五郎と石狩アイヌの漕ぎ手八人で、札幌創成川を出発する。十日目にカムイコタンに到着するのであるが、ここ



からは、高畑利宜の出張復命書で見てもみよう。
「札幌ヲ発シ、十日目ニ神威古丹口ノ大淵ニ至ル。同所ヨリ上陸、凡ソ一里間陸行、字ハルシナイ太ニ至リ露宿、二日滞在、携帶品ヲ陸送シ船ハ空船ニシテ、ハルシナイ太ニ引キ上げ、廿七日同所ヨリ乗船、字忠別太ニ至リ、同所ニ草葺ノ掘立小屋ヲ建設シ、之ヲ以テ滞在中ノ宿泊所ニ宛ツ(句読点は筆者による)カムイコタンの大淵は、パラモイ(Parmoy 広い・湾)のこと。ここからハルシナイ太(プトウ(Putu 川口))ハルシナイが石狩川と合流する所」に、携帶品を陸送し、丸木舟二隻は、空舟にしてハルシナイ太まで引き上げたのである。そのためハルシナイに二日間露宿したのである。六月二十七日に、再び丸木舟で、忠別太(現・旭川市忠和)に向かった。

この復命書は、大正三年に高畑利宜自身の手で筆写されたものであるが、同じ出張復命書でも、松浦武四郎のそれと比較すると、実に事務的である。アイヌの人たちの伝説等に全く関心がなかったのか、これらについては、一切触れていない。

(アイヌ語地名研究会幹事)
※毎月第1週号に掲載します